

研修会に参加して

筑波大学
ビジネス科学研究科
原久美子

2012年12月10日に開催された地理空間情報利活用推進に関する研修会に、学生の立場で出席を致しました。現在、わたくしはSNS情報と広義のGISを組み合わせた災害時の市民自助システムについての研究をしています。

研修会は朝10時から夕刻にかけ、大変充実した内容で行われました。少し時間が足りないと感じるほどでした。また参加者も多く非常にみなさん熱心に耳を傾けておられ、質疑応答もとても活発であったことが印象的でした。

まず国土地理院の長谷川氏のプレゼンにおいては、これからの日本における地理空間情報の利活用について、地理院のご活動やポリシーを、豊富な例とともに非常にわかりやすくご説明頂きました。

日々変化する社会、ものすごいスピードで普及し続けるポータブルデバイス、各種SNSや位置情報を用いたビジネスの隆盛、地図というものへの意識の急激な変化。このような状況のもとで「伝統があり簡単に変えてはならないもの」と「リアルタイムで変化に対応していかねばならぬもの」という全く正反対の質のプロジェクトを同時進行で進めることは想像を絶する困難であると思われます。しかし、長谷川氏の職務に対する熱意がプレゼン・質疑応答の間ずっとこちらに伝わって来ており、寒い日でしたが少し会場が暖かく感じられるほどでした。

午後の会員企業各社によるプレゼンテーションも、午前に引き続き熱のこもったものでした。また各社とも想像していた以上に「一般ユーザー寄り」のマーケティングに力を入れておられるんだということが良くわかりました。地図というのは長いことプロフェッショナル、つまり地図の世界の神官にしか操作のできない対象であったと理解しています。それが2000年以降、扉が開いた。人々は気軽に地図や空間情報を利用し始めています。地図の上に「自分たちで何を乗つけるか」ってことに「フツーの人々」がわくわくしている時代なのだと思います。

午前の部からずっと考えていたのですが、「生の」地図情報については、クオリティが高くてもそのままでは一般の人々が利活用するのは難しい場面が多いと思われます。それを出来るだけわかりやすく翻訳して世に出す、という重要な仕事を黙々と行なって来られたのが地図調製業ということですね。つまり、新鮮で高品質な食材を仕入れ、素晴らしい調理でゲストに提供するシェフのような役割を担って来られたのではないかと。広義の地図ビジネスがさらに拡大すると言われている2013年、このように築かれ、維持され、また進化もして来た基盤の上に、今までなかったタイプのびつ

くりするようなビジネスモデルもまた、繁栄して行くのだろうと思います。

個人的にはGoogleMapsなどのいわゆる『無償、もしくは無償とされているWebマップ』が普及した現在、登山者などを除く一般ユーザーにとっては、必要な情報を得るための地図といえば、ある限定されたWeb地図のことを指していると感じています。人は基本的に見慣れたものに愛着を持ちます。日々そのWeb地図に接していれば、いつのまにかそちらがデフォルトとして認識されて行きます。

旧来の地図記号が読めない、地図に描かれた等高線を邪魔だと感じる、コンビニエンスストアなどのランドマークがない地図ではどこにも行けない、という地図ユーザーは増加の一途だと思っています。よく言われる例では、我々は文字を手で書かずにタイプすることに慣れきってしまったために、手書きで文字を書くことをおっくうに感じ始めています。同じように、地図上のコンビニエンスストアや銀行のアイコンを脳内変換して実空間と合致させる能力をも、我々はやがて失って行くのでしょうか。一人一人がウェアラブルのゴーグルのようなものを身につけて移動すれば、実世界の視野に重ねて必要な情報や楽しい情報が重ねて表示される、そのようなデバイスも普及し始めればスマートフォンのように一気に“日用品化”するかもしれません。それが便利だとわかれば、ゴーグルはイヤフォン大になり、もっと小さくもっと便利で安価になって行く。

10年後、20年後、人々は、抽象化された地理空間情報を理解する能力をすっかり失っているのかもしれませんが。たとえばストリートビューのように現実の空間情報を見たまに表示しなければ、不便だと感じる人ばかりの世界が来る日も近いかもしれません。

前段で述べたような状況であればこそ、ユーザーに「地図の存在」を意識させない、つまり余計なストレスを感じさせないで地理空間情報を利用するための基盤、また地理空間情報を用いてのコミュニケーションを行なうための基盤は重要性を増して行くのではないのでしょうか。そのような状況下においては、表面に見える地理空間情報は少ないけれど、見えないバックグラウンドで緻密な地理空間情報がきっちり動いている、というのがわたくしの理解です。ですから、地理院や地理調製業の方々が果たされている役割は今後ますます大きなものになるのだと思います。

最後に、一般の立場からの参加を快く受け入れてくださった協会の皆様、少し場違いな質問にも親切にお答え頂いた地理院の長谷川氏に心から感謝を申し上げます。

